



### ワールド・ハラール・サミット2015報告

イスラーム研究所 山崎昭彦

2015年3月30日から4月3日までマレーシアで開催されたワールド・ハラール・サミットに参加するため、武藤秀臣・イスラーム研究所シャリーア専門委員会委員長、小林栄三・同研究所科学委員会副委員長とともに3人でマレーシアに出発、クアラルンプールにて木村遼・同研究所マレーシア駐在員と合流した。今回は、いくつもの会議が同時開催となるため4名がそれぞれ分担して会議に臨むこととなった。

ワールド・ハラール・サミット (WHS) は、毎年マレーシア・クアラルンプールで開催される国際会議で、主催は国際貿易工業省 (MITI)、マレーシア貿易開発公社 (MATRADE) ハラール産業開発会社 (HDC) マレーシア・イスラーム開発庁 (JAKIM) によって構成されている。また今回は国際イスラーム大学マレーシア (IIUM)、科学大学バンドンマラ (UITM) も戦略的パートナーとしてこのサミットに参加していた。

今年12回目を迎えるWHSは、世界最大級の国際ハラール見本市 (MIHAS) と6つの会議とフォーラムが併催されていた。テーマは「ハラールエコシステムの活性化」である。

WHSの開会式に先立って3月30日から2日間に渡ってJAKIM主催のハラール認証団体による会議が行われた。

#### 第6回 JAKIM 国際ハラール認証団体会議

2015年3月30日から3月31日の2日間、マレーシアのプトラジャヤ・インターナショナルコンベンションセンター (PICC) においてマレーシア・イスラーム開発庁 (JAKIM) による第六回JAKIM 国際ハラール認証団体会議が開催された。

この会議はマレーシア・イスラーム開発庁 (JAKIM) が認めた世界のハラール認証団体 (CBs) のみ招聘され参加が許される会議である。世界33か国73認証団体の参加があった。

この会議の目的は、以下の通り。

- 1) マレーシア・ハラールスタンダードと手続の履行について理解向上を図ること。
- 2) ハラールについてその経験と知識を共有し、さらに認証団体

の能力を充実させる場を提供する。

- 3) 世界的にハラール認証を増大させること。
- 4) 海外のハラール認証団体間のハラール認証関連問題を解決すること。

会議ではマレーシア・ハラールスタンダードやJAKIMの経験に基づくハラール認証問題について活発な意見交換がおこなわれた。

#### 国際ハラール見本市 (MIHAS)

世界最大級の国際ハラール見本市 (MIHAS) は首都クアラルンプールにあるマレーシア・クアラルンプール・コンベンションセンター (KLCC) で4月1日開幕した。

約640ブースが設けられ世界70か国からイスラーム圏でのビジネスの拡大を目指す企業団体等が参集し様々な「ハラール」製品や商品を表示していた。



ハラール国際見本市会場風景

展示品の取扱いは飲食品が全体の75%を占め、その他化粧品、医療品、医薬品、ヘルスケア商品、銀行、金融など多岐にわたっていた。日本からは食品関連10社とその他2団体の参加が見られた。

#### 第8回世界ハラール会議 (WHC)

サミットの第8回世界ハラール会議 (WHC) はハラール産業開発株式会社 (HDC) により組織された会議である。

この会議は世界ハラール産業の将来展望について、ハラール経済の様々な利害関係者が共通の場で検討しあい絆を強めていくものである。

#### 各種フォーラムの開催

##### 1) 保証人フォーラム

保証人フォーラムはハラール認証団体とハラール・スタンダード開発機関のメンバーが共通の立場に向け新たな道を模索するための会議である。

このフォーラムは新しいアイデアやハラール市場の基盤を強化するための方法を出す目的で、関連する問題をめぐっての率直な議論が奨励される。

##### 2) 研究者 (アカデミー) フォーラム

研究者フォーラムは研究者専用の教育、訓練計画と学習単位、産学官連携の役割や世界のハラール産業関連分野にも焦点を当てている。

人的資本として重要不可欠なハラール産業に求められる人材育成を促進していくことを目指す。

### 3) 学者（スカラー）フォーラム

学者フォーラムは世界の学者とコミュニティのリーダーが広くイスラーム経済に関連する話題を討論する権威ある会議である。

### 4) ビジネスフォーラム

ビジネスフォーラムはイスラーム経済の中で貿易・投資というエキサイティングな分野に進む方法を探ることを目指す。ハラールビジネスとイスラーム銀行との連携、民間株式会社と投資銀行との連携といった投資マッチングセグメント（IMS）も含まれる。

## 最後に

4月1日WHS会開式基調講演の中で、ナジブ首相は、マレーシアのハラール産業は国際的に高く認知されており、食品、金融のみならず他の分野にも拡大していると述べた。

また、東南アジア諸国連合（ASEAN）の議長国としてハラール

産業に力を注ぎASEANを世界のハラール・ハブにしてゆくと述べた。

同じくWHS開会式歓迎のあいさつの中で、ムスタファ・モハメド貿易産業相は、ハラール産業は、商業収入、雇用機会などイスラーム諸国の経済に大きく貢献している。

旅行、メディア、化粧品、イスラーム銀行とハラール・ベンチャービジネス・リンクなどは新たな取組みであるが、今後はイスラーム金融ブリッジ、ハラール供給系列網、ハラール・ワクチン、栄養補助食品や機能性食品などの新興分野にも戦略的な洞察力を注いでいくと語った。

マレーシアは、東アジア諸国の中でも目覚ましい経済発展を成し遂げている国である。

そしてその原動力の一翼を担っているのが、ハラール産業ではないだろうか。

マレーシアの国家戦略であるハラール産業への取り組みが着実に実を結び、成果となって表れてきている。今後もマレーシアのハラール産業の動向を見守ってゆきたい。

## イスラームの法と宗教（5）

イスラーム研究所長 森 伸生

（前号より）

### ガザリーとイブン・アラビーの違い

ウラマーとスーフィーの思想的融合を説いたガザリーの宇宙論と、神秘主義思想を確立したイブン・アラビーの宇宙論との相違を検討する。

#### (1) イブン・アラビーの宇宙論

イブン・アラビーの宇宙論は中心に向かった4重の同心円図によって説明される。中央小円が「アハド（絶対的一性）」、その次の外円が「ワーヒド（相対的一性）」、その次の外円が「ハヤール（想像・イメージ）」、その次の外円が「ムルク界（現象界）」である。イブン・アラビーの宇宙論では、宇宙は絶対的一性であるアハドの自己顕現の結果として実在するものと理解される。

まず、そのアハドが内部的な分節化によって、様々な属性を持った人格神に変容する。それがワーヒドである。つまり、アハドは不変、不動なものであるが、それが色々な属性を持った形で現われてくるのがワーヒドである。

次に諸属性が具体的なイメージとして外に現われてくるのがハヤールである。それらを通して、アハドは個物として現象世界に自己を顕現している。つまり、アハドがこのワーヒドを使ってイメージの世界で自己顕現をしていき、その対象として現われるのが現象界であり、そのすべてがアハドから流出したものと考えられている。<sup>1</sup> ここがガザリーの宇宙論と違うところである。

#### (2) ガザリーの宇宙論

ガザリーの宇宙論を円で表すと、中心に向かった5重の同心円図によって説明される。中央小円が「神の本質」、その次の外円が「神の属性」、その次の外円が「マラクート界」、その次の外円が「マラクート界とムルク界の混在世界であるジャバルート界（人間）」、その次の外円が「ムルク界」である。

ガザリーは、現象界と区別されたマラクート界は神が永遠なる命令で一挙に存在化した世界であるとして、神とは本質の上でも、属性の上でも、明確に区別している。つまり、ムルク界でもマラクート界でも、神とはすべて一線を画した存在である。<sup>2</sup>

#### (3) 両宇宙論の違い

ガザリーの神の本質はイブン・アラビーのアハドに、神の属性とマラクートはワーヒドに対応しており、この対応は非常によく合致するが、大きな違いがある。

イブン・アラビーの場合、それはすべて一体化し、アハドからすべてが流出しているわけである。しかし、ガザリーの場合、イブン・アラビーの宇宙論用語に合わせて考えれば、アハドとワーヒドの部分は一体化していて、その後のハヤールの部分（イメージの部分）、現象界の部分は全部被造物となるので、まったく別なものとして存在する。だから、創造者と被造物、主とそれに仕えるものという厳格に分けている。イブン・アラビーはそれを一体化させてしまったわけである。

#### (4) 神秘体験の内容の違い

一時的な一体化体験とするか、神と一体化したとするか

神秘体験におけるガザリーとイブン・アラビーの違いは何か。ガザリーにとって、あくまでも神は創造者として存在して、その他のものは、不可視界の世界であったとしても、すべて被造物である。ゆえに、「合一」体験においても、ガザリーは「合一」を「グラスの中にある酒」と表現している。<sup>3</sup>

グラスの中の酒は透き通っているのでグラスと一体となっていると勘違いしやすいが、ひっくり返してみればグラスと酒は別物であることがわかる。つまりは、そこで自分がある意味の一体化体験をするだけで、それは一時的なものであり、また元に戻るとしているのがガザリーの見解である。

イブン・アラビーは「合一」体験は神の中に入ること、神と一体化したという考えである。

ガザリーはウラマーとスーフィーの接合で、あくまでもウラマーの基本的な「創造者と被創造者」の体系を崩さずにスーフィーの世界を見ていったが、それに満足しなかったのがイブン・アラビーである。イブン・アラビーはファーラービーやイブン・シーナーのイスラーム哲学の継承をそのまま体系化したと言える。

比較すると、ガザリーには合一についての直観と認識を一步引いて厳密に分かつ禁欲的な姿勢が見られるが、イブン・アラビーは合一体験を至福として受け止めているように思える。これは生来の気質と後天の修行によるところから来るのであろうか。

1 中村前掲書、p.291

2 前掲書、p.116

3 前掲書、p.294

## おわりに

### ガザリー思想に秘められた信仰の可能性と社会改革

ガザリーの思想的展開及びイブン・アラビーの神秘主義思想をスーフィー研究者・中村廣治郎の研究成果をもとに解釈を試みてきたが、ここにガザリー思想に秘められた信仰による人間の真理悟得の可能性、さらにその信仰によって社会革命を如何に可能ならならしめるのかを考えてみたい。

#### (1) 不可視界と現象界の通路としての「人間」による社会革命

ガザリーの宇宙論やスーフィズム理論の根底にある基本的確信は、不可視界と現象界の通路としての「人間」の存在である。人間の肉体は現象界であり人間の心は不可視界である。「心」は二つの知覚の「窓」であり、一つは感覚世界、他は不可視界に向かって開かれている。いうなればジャバルートとしての人間の存在である。

人間はもともと神の意志を悟得する能力を持っている。しかし、普通の人間が神の意志を悟得できないのは、現世への執着、傲慢、自我意識などにとらわれているからであり、神の意志を感知する心が曇っているからである、と説いている。

心の曇りを排除するために、預言者の伝えた啓示によるシャリーアの儀礼的規範を修行の指針とし、心の浄化を求め修練を積むことであるとした。そして、心を浄め、自己を完全に無にするときに神からの特別な恩寵として、不可視界を垣間見ることができ、神の意志を知り啓示の真実性とシャリーアの意味を悟得して完全な信仰を確立することになる。

信仰の確立した個人が共同体を形成し、共同体全体がシャリーアを実施することにより、個人でできない現世的福利を実現させる、そして、それらは来世のための準備になるとガザリーは考えた。これは修行によって悟得した信仰とシャリーアを実施して神の意志を体現する社会改革とみることができる。

信仰生活と日常生活が個人の範囲に納まっているのではなく、つまり閉ざされているのではなく、共同性を担うことによって開かれている、この開かれはさらに行を積み重ねることにより来世に行く回路を内面で構築していくという複合的な多面性を有している。

それはイスラーム世界の歴史的変転の未来への投影であると見ることができる。

#### (2) 呪術化と世俗化によるスーフィー初心の喪失

スーフィズムは、形式的律法主義的なウラマー主導のイスラームに対し、内面的な神秘的体験を尊ぶものとして出現し、その先駆者たちはいわば精神的エリートであった。

彼らの理論的努力の結果、スーフィズムはようやく正統イスラームの中に認められるようになり、徐々に一般民衆にも定着し、11世紀、12世紀以降は民衆イスラームの特徴とさえた。

スーフィズムが大衆化されていくにつれて、神から与えられた特別な呪力を持つことができたスーフィー聖者は彼の死後もその墓には呪力があると考えられ、多くの人々が聖者の墓に集まり墓にさわってこの呪力を授かるようになった。いわゆる聖者崇拜が生まれてきた。

スーフィーたちの中にも、十分な知識や倫理的な準備のないままに、奇矯な修行や奇跡を重んじ、やみくもに異常体験のみを求めようとする者も出てきた。それは、特別な呪力は神から与えられた結果の恩恵であることを忘れ、一定の手段によって人間の力で獲得できるものと錯覚した結果である。そこから、スーフィズムの呪術化・世俗化が始まったといえる。

スーフィー自身にとって重要なのは奇蹟そのものではなく、その背後にある心の内的状態、信仰のあり方であり、これこそ本来の意味の奇跡、神の特別な恩恵として重要であったはずである。

スーフィズムの民衆化はムスリム大衆の信仰を豊かにしていったが、一方では土俗信仰をイスラームに取り込む結果にもなった。

16世紀頃を境に、スーフィズムは知性の規制からはずれ、ますます呪術化していき、ついには積極的な知的躍動を失い、社会と離

脱した無気力な存在となった。

#### (3) ガザリーを現代東西の碩学はどう受け止めたか

ガザリー理解に関して、イスラーム学の碩学、元エディンバラ大学教授、故モンゴメリ・ワット（1909～2006年）が、ガザリーの生涯について、広く共同体の中に位置づけて理解しようとし、ガザリーの不安は、「本質的には自己の文明が危機に瀕して」いるとの意識があったとの見解を示した。ワットはその「危機」について明確にしていなかったこともあり、中村廣治郎はそれについて『誤りから救うもの』翻訳本の解説にて、次のように解釈している。

「私はこの『文明の危機』を、シャリーアの実践を通して、地上に「神の国」を築くことを目指す、イスラームの古典的共同体型の信仰が、多くのムスリムに意味を持ち得なくなり、新しい信仰のあり方、すなわちスーフィー的個人型の信仰が求められていたと解したい。

その背景には、1258年のモンゴル軍の侵攻によるアッバース朝カリフ体制の崩壊という象徴的事件に至るまでの、イスラーム共同体の政治的分裂と混乱がある。そのような状況の中では、地上に聖法に基づく統一的な理想的共同体を築く神の道への参加の中に、神との交わりを求める古典的な信仰より、むしろスーフィーのように、自己の内面の浄化によってそこに神を見出し、それと直接交わり、来世に救いを期待する信仰のあり方が、より現実味を帯びてくる。」(同p.199)

この節から、ガザリーが信仰の再生、内面の充実をスーフィズムに求めたことが明確に示されている。中村廣治郎はガザリーが内面の浄化を求めたことにより、来世に救いを期待する方向性が強いと解釈したようである。<sup>4</sup>

#### (4) ガザリー復権の意味するもの

イスラーム史の変転を簡略化すれば以下のように言える。

信仰と共同体の一体（預言者と教友時代）から分離（法の形骸化とスーフィーの登場）、そして再調和の試み（ガザリー思想の出現）、しかし個人的信仰の独走（イブン・アラビー思想の浸透）、そして暴走（スーフィズム信仰の民俗化）の果て、個人と共同体の再分離（信仰の個人化と共同体／ウンマ・イスラミーヤの弱体化）、これが現代イスラーム世界の姿である。今こそ、ガザリーが主張した個人と共同体の融和、信仰と法の調和が求められている。

遍歴を重ねてガザリーの把握したイスラームの信仰は、こうした多面性をもった重層構造を有していたところから、やがて東方ではインドや中国の諸思想に、西方に向かってはキリスト教の活性化に刺激を与えた。その先行事実から、今後のキリスト教圏だけでなく中国など他の文明での信仰的な世界認識にも影響をあたえていくのではないかと。

非イスラーム世界の人々がそこに「文明の断層線」があると思いついていても、行を通して真摯に取り組むと「断層」を乗り越えて説得力をもつようになると思う。世俗化の進行と拡大によって魂の空洞化が現代人の特徴になっている精神状況では、再び影響力をもってくるように感じる。

筆者は2007年12月のマッカ巡礼にサウジアラビア巡礼相の招待により参加することができた。そこで、マッカから25km東にある巡礼地アラファの平原に逗留する300万人がともに祈る姿にウンマの一体感を感じつつも、一緒に巡礼を行ったトルコ人イスラーム学

4 だが、ガザリーは信仰の浄化と同時に、それによってシャリーアに基づく統一的な理想的共同体を現世に築くことも目指したはずである。ゆえに、形骸化したウラマーを非難し、シャリーアを基盤としたスーフィーの行というものを提唱した。シャリーアを浄化された信仰をもって体現することができたならば、共同体は必ず神に導かれ、理想的な姿を現すと考えた。逆に信仰のないシャリーア施行に何の意味もないことを執拗に警告したのである。

なぜかれは執拗な警告をしたのか。ガザリーは人間の内なる力に期待し、その力はスーフィズムの行によって覚醒されることを確信したが、同時にそれは共同体の再構築と併行されるものとしていたからだ。そして、それは素朴な信仰の生きた預言者時代の再生を意図していたと思う。

者（75歳）が「イスラーム世界が衰退したのはウラマーの怠慢に主たる原因がある。ウラマーはウンマの責任者であり、つねに時代に即した解釈をクルアーンとスンナから導き出す努力をすべきである。それを忘れるべきでない」と指摘した言葉が印象に残っている。さらに「宗教教育と一般教育を別にするのが問題である」と俗化したイスラーム社会を憂い、信仰と法の一体化を主張する姿に、ガザリーの改革精神が現代のウラマーに継承されているのを見る思いであった。

参考文献

『日亜対訳・注解 聖クルアーン』宗教法人日本ムスリム協会、1998年10月  
 『(日訳サヒーフムスリム) 第三巻、日本サウディアラビア協会、1991年10月  
 中村廣治郎『イスラーム 思想と歴史』東京大学出版会、1996年6月  
 中村廣治郎『イスラームの宗教思想—ガザリーとその周辺』岩波書店、2002年  
 ガザリー『誤りから救うもの—中世イスラーム知識人の自伝』中村廣治郎訳、筑摩書房、2003年8月  
 赤堀雅幸、堀川 徹、東長 靖『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、2005年1月

東長 靖『イスラームのとらえ方』山川出版社、1996年11月  
 ラレ・パフティヤル『スーフィー—イスラームの神秘階梯』竹下政孝訳、平凡社、1990年3月  
 竹下政孝「後期スーフィズムの発展」『講座イスラーム1 イスラーム・思想の営み』筑摩書房、1985年9月  
 『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年2月  
 井筒俊彦『イスラーム思想史』中央公論社、1991年3月  
 S・H・ナスル『イスラームの哲学者たち』黒田壽郎、柏木秀彦訳、岩波書店、1975年  
 『田中逸平—イスラーム日本の先駆』拓殖大学創立百年史編纂室、2002年3月  
 Mannau al=Qattan “mabahith fi ulum al=Quran (クルアーン学研究)” Muassah al=Risalah,1980  
 Mannau al=Qattan” al=tashrii wa al=fiq fi al=Islam (イスラームにおけるシャリーア形成とフィクフ)” Muassah al=Risalah,1982  
 al=Imam al=gazali “al=Munqiz Min al=Dalal (誤りから救うもの)” Dar al=Taqwa,Damascus,1992、(引用部分翻訳を中村廣治郎『誤りから救うもの』2002年から借用参考)  
 al=Imam al=gazali “Ahyau Ulum al=Din (宗教諸学の再興)” Dar al=Fikr 1980(引用部分翻訳を中村廣治郎『イスラームの宗教思想』2002年から借用参考)

ベトナムのムスリム事情 (5)

イスラーム研究所科学委員会委員長 武藤 愛

昨年のベトナム南部カンボジア国境沿・メコンデルタ地区の Chau Doc (ベトナム人ムスリムの最大コミュニティがある) 地区訪問に続き、今回は、ベトナム中南部のベトナム人ムスリムの一つの拠点、Phan Rang市を訪問した。

同市訪問は、昨年に続き二度目であり、(独自の言語を持つチャム族の) チャンパ・ムスリムの実態と課題、又、アッラーへのシャハーダ (信仰の告白) を持つチャンパ・バニ (Champa Bani : ムスリムであると主張) の実態調査を目的としたものである。

ベトナムの歴史上、2世紀に中部の古都フエに、チャム族がチャンパ王国を造った。この国は、4世紀に国王が、ヒンズー教のシバ神を崇拜したことより、ヒンズー教が国教的な扱いになった。チャンパ王国の主都市は特に8世紀以降、東南アジアの海上交易の拠点として繁栄し、中国とオリエントとの交差路として、多くの異国人が往来していた。シルクロードからの陸路南下、海のシルクロードを経由して、多数のムスリム商人たちが来訪、居留していたとされる。王国の経済基盤が、貿易商活動であり、必然的にイスラーム教含め異国人の宗教及び布教活動に対しては、寛容な政策を採っていた。

8世紀以降、チャンパ王国は、北部ベトナムからの圧迫を受け、首都をNha Trang、Phan Rangへと南に移し、勢力範囲は縮小して、15世紀には、北部ベトナム軍との戦いに敗退し、独立国としての体は失われていった。王国の滅亡期に、一人の王が、イスラームに改宗したとの記録も残っているとされるが、殆どのチャム族の宗教観のベースは、ヒンズー教であり、その社会に、ムスリム社会も共存していたと考えられる。

他方、ベトナムの南部、メコンデルタでは、マレー半島から移住してきたジャワ系のムスリムたちが定住しており、イスラーム教は、メコンデルタからカンボジアの範囲で、伝播していた。従い、チャンパ王国衰退・滅亡期には、王国から、異国人ムスリムたちと共に、南部メコンデルタ地方に移り住んだチャンパ・ムスリムもいたと見られる。

現在、ベトナムのムスリム人数を調査するに、聞く人によって4万人から8万人との異なった回答で、正確に把握することが難し

い。この中には、外国人ムスリムも含まれており、ベトナム人ムスリムの実数は、3万から4万人と考えている。この中には、「自らをムスリムと主張する」チャンパ・バニは、含めていない。

当地のムスリム社会は、上述の通り、その歴史的な背景から分けて、大きく二分類できる。一つは、マレー半島から移住して、肥沃な南部メコンデルタ地区に定住したジャワ系ムスリムと、8世紀以降隆盛を誇った中南部のチャンパ王国の後裔とつながりを持ち、自らムスリムであると主張するチャンパ・バニとチャンパ・ムスリムである。

本記録は、チャンパ・バニとチャンパ・ムスリムの実態調査の報告である。

1) Phan Rang 視察のスケジュール

3月6日 (金)

- 21 : 00 ホーチミン市 Mien Dong ターミナル出発  
 Mien Dong は、ホーチミン中心部から北東に約6キロ。ハノイ、フエなど北部方面に向かう長距離バスの発着場。Mr. Mohammad Amin (ベトナム人。ジャワ系ムスリム)、Mr. Misri (マレーシア人)、Mr. Isa (フランス領事館勤務チュニジア系フランス人) と、ホーチミンのモスクで集合し、バスターミナルへ。  
 バスターミナルでは、Hj. Ibrahim 夫妻と、長男 (Mr. Salman)、次男 (Mr. Naim) 4人と落ち合った。総勢8人でのPhan Rang小旅行。

3月7日 (土)

- 05 : 00 Phan Rang バスストップ着
- 05 : 30 Hj. Ibrahim 邸に到着。ファジュル礼拝と朝食  
 Phan Rang市は、ホーチミンの北東東約340キロ。
- 09 : 00 チャンパ村落 (Thanh Tin village : 殆どチャンパ・バニ) 織物の村 (My Nghiep village : チャンパ・バニ主流伝統工芸)  
 陶器の村 (Bau Truc village : チャンパ・バラモン主流伝統工芸)
- 11 : 00 チャンパ村落 (Phu Nhuan village : ムスリム 3家族)  
 チャンパ・バニ長老 (Karu2名と面談、聞き取り調査)

チャンパ・パニ礼拝所「モスク」を訪問  
 12:00 Champa Tower (チャンパ王国の遺跡)  
 14:00 Hj. Ibrahim 邸。ズフル礼拝と昼食  
 15:00 埋葬地「Qubul」(チャンパ・バラモン用、チャンパ・ムスリム用建設予定地、チャンパ・パニ用)  
 16:00 チャンパ村落 (Van Lam district: ムスリム 約300家族) モスク訪問 (Phan Rang には4つのモスク。私宅の礼拝所は別)  
 アスル礼拝と聞き取り調査  
 17:00 Phan Rang 海岸  
 17:30 Hj. Ibrahim 邸  
 マグリブ礼拝と夕食  
 21:00 Phan Rang バスターミナル出発  
 (途中エアコン故障修理で、1時間立ち往生。結果直らず、蒸し風呂のバス旅行)  
 3月8日 (日)  
 05:30 ホーチミン市 Don Nai バスターミナル到着  
 06:00 帰宅

## 2) Hj. Ibrahim 家族と改宗への経緯

### ①家族構成

Mr. Kieu Quoc Chi (1954生): Kieu 家の家長 Hj. Mohammad Ibrahim (2011年改宗)  
 Kieu (姓) 家で、5人弟妹の家族の嫡男として生まれる。  
 Hj. Ibrahim 家は、5人の男子と1人の女子。孫5人も含め13人、全員ムスリムの家族。  
 Mr. Kieu Quoc Chien (1992生): Hj Ibrahim の次男 Mr. Naim Ibrahim  
 Mr. Naim は、今年3月に、インドネシアの Islamic University of Sultan Syarif Kasim Riau 卒業  
 Hj. Ibrahim のベトナムでの戸籍上の名前は、Kieu (family name) Quoc (middle name) Chi (name) となる。



Hj. Ibrahim 一家と蒸し風呂のバスの車中

### ②イスラームへの軌跡

Hj. Ibrahim は、Phan Rang の Thanh Tin village で、祖父が Mum (長老)、父親も Mum と言う、チャンパ・パニの長老の家系に生まれ、本人も Mum になる為の教育を受けた。20数年前に、10歳違いの弟が、クリスチャンの女性と結婚する時に、弟が、ムスリムに改宗したことも切っ掛けの一つで、イスラームに関する知識もあり、関心も高かった。

次男の Chien (現ムスリム名: Naim) が、4年前、ホーチミンの高校3年生の時に、ムスリムに改宗。

Mr. Naim の改宗に対する大きな動機は、「もっと、色々な勉強を続けたい。その為、インドネシアの大学へ留学を希望。その条件が、ムスリムであり、改宗をして、インドネシアへ」という事であった。

その翌年(今から3年前)に、Hj. Ibrahim は、家族と一緒に、改宗。

その後、Hj. Ibrahim は、祖父の代より所有していた、Thanh Tin village から3キロほどの所に、家を建て、個人の礼拝所も設けて、近隣者、縁戚者へのイスラーム改宗への活動を行っている。

2013年末までに、チャンパ・パニの26家族、142人(本人たち

を含め)をムスリムに改宗させた。

現在は、同区の改宗者は、34家族に増えているとの事。

### 3) チャンパ・パニのイスラームへの改宗の経緯

Phan Rang 最大のムスリム地区 Van Lam で、モスクに集うムスリム達(地区の Hakim Hj. Aminel は、病気の為、ホーチミンの病院に入院中で不在)より聴取した話。

#### ①チャンパ王国の宗教小史

チャンパ王国は、4世紀の中ごろ、ヒンズー教のシバ神の信仰を取り入れた。それ以降、王国が、北部ベトナム(越族)、漢族の支配、影響を受けて、チャンパ王国は、南に遷都していく。8世紀以降、ベトナム中南部の Nha Trang、Phan Rang が、王国の中心になっていった。

現在、Phan Rang にいるチャンパ達は、受け継ぐ宗教観より、チャンパ・バラモン(シバ神を信仰)と、チャンパ・パニ(イスラームより派生した民間信仰)、更にムスリムに改宗したチャンパ・ムスリムに分かれる。

チャンパ王国は、シバ神信仰を国教的な扱いにすると同時に、中国經由陸路及び海のシルクロードを通じて来訪、居留したムスリム商人たちの宗教活動も寛容に受け入れた。その後は、南方のジャワ系ムスリムたちもメコンデルタ中心に定住して、中部のチャンパ・ムスリムたちとの関係を作り、ベトナムでのイスラームの教えが伝播していったと考えられる。

しかし、15世紀になり、チャンパ王国が衰退する時期に、チャンパ(チャム族)たちの国外脱出(海南島經由中国、フランス、米国、マレー等への移民)が起こり、ムスリム社会も変容していったと考えられる。

さらに、19世紀に入り、フランスの植民地化政策(カトリックの積極的な布教活動)とその後のベトナム戦争などの影響もあり、残った(非バラモンの)チャンパたちは、「国際的な孤立化」の中で、土着民間信仰と結合しながら、チャンパ・パニとしての独自の宗教「Bani Islam」を受け継いでいったと思われる。

他方、マレー半島經由移住してきたジャワ系ムスリムの定住地メコンデルタ・カンボジアで、チャンパ王国から移動してきたチャンパ・ムスリムとジャワ系ムスリムの結びつきも起き、近世のベトナムでのイスラーム伝播に貢献して行った。

#### ②現代史でのベトナム中南部でのイスラームの布教活動

1950年代、Phan Rang 南部地区には、7つのチャンパ村落があり、当時のチャンパ(Champa: チャム族)は、バラモン以外全て、パニであり、ムスリムは居なかったとされる。

1960年: インド人商人 Hj. Ismail Morabi が、Phan Rang を訪問  
 ホーチミンには、1935年に中心的モスク(Masjid Muslimin: Sheraton Hotel となり)が、インド人商人の献金で建設された。

Hj. Ismail は、Phan Rang 訪問時に、面談したチャンパ・パニの宗教司祭者(Thay Chan)を、ホーチミンに招待し、イスラーム布教に努めた。

それを切っ掛けに、2名の Thay Chan が、ムスリムに改宗した。

1960年前後: Hj. Ismail の訪問した Phuoc Nam village (Phan Rang の南約20キロ)では、Tu Cong Xuan (改宗名: Abdul Karim) とその子供 Tu Cong Thu (改宗名 Hassan Karim) が、イスラームへの積極的な研究を進めていた。ベトナム語での最初のクルアーン訳は、Hassan Karim (現在米国滞在: 80歳超)が、英語からベトナム語に翻訳したもので、現在でも、ベトナムでは、広く使用されている。

Phan Rang 南部のこの地区が、現代のチャンパ・ムスリムの拠点となっていった。

1968年ころ: 改宗ムスリムへのパニからの嫌がらせが昂じて、両

派間の衝突も見られたと。

現在、同地区では、場所によっては道路を挟んで、ムスリムとバニが家を構え、友好関係を保っている。

### ③ Phan Rang のモスク

Phan Rangで初めてのモスク (Masjid Muslimin) が、1962年に開所され、同モスクを含め、Phan Rang地区には、以下4つのモスクがある。

1962年：Masjid Muslimin 101 (Phuoc Nam village, Ninh Phuoc district : Van Lam)

1999年：Masjid Mubarak 102 (Xuan Hai village, Ninh Hai district : Phuoc Nhon)

Masjid Noor 103 (Xuan Hai village, Ninh Hai district : An Nhon)

Masjid Niamah 104 (Phuoc Nam village, Ninh Phuoc district : Nho Lam)

2009年 Masjid Niamah (Hoa Trinh) は再建。ベトナム語で、Masjid は、Thanh Duong Hoi Giaoといわれる。



Phan Rang地区の一番古いモスク (101) での打合せとヒヤリング

### ④ Phan Rang におけるムスリムの活動拠点

南部のPhuoc Nam villageとXuan Hai villageには、300家族のムスリムと、1000家族のチャンパ・バニが同じところで生活している。人数的な比較で聞くと、3千人のムスリムと、3万人のバニとの説明を受けたが、数字の正確性は中々つかめないが、チャンパたちの家族構成の大きさ (1家族10人以上の単位が一般的) を表している事は、理解できた。

またHj. Ibrahimの様に、生活拠点を新たな土地に移して、生活し、布教活動をしているムスリムもいる。

Hj. Ibrahimは、自宅側の土地に小礼拝所 (モスクの建設許可には、5家族以上の居住証明が必要と) の建設と、Qubul (埋葬地) の建設を計画している。

チャンパ・バニの拠点でもあるPhu Nhuan village (Phan Rang市西部約5キロ) では、ムスリムに改宗した3家族がいるが、かれ等は、礼拝の為20キロ南部の上述のPhuoc Nam villageに通っていると。

### 4) チャンパ・バニの宗教と儀式執行者

今回のPhan Rang訪問では、Hj. Ibrahimの人脈及び精力的な活動で、チャンパ・バニの長老二名 (Mr. Hua Dich 82歳と他一人) と会い、祈り (ドアー) の内容などを詳しく聞くことが出来、かれの保管しているクルアーン解説書、儀式の説明書などの読み方を記録することが出来た。

以下内容は、バニ長老とHj. Ibrahim及びその仲間 (元バニ) から聴取したもの。



チャンパ・バニの長老 (Karu) と談笑。  
更に、持参したクルアーンと彼らの解説書の比較

### ① チャンパ・バニの宗教職位

Thay Chan (チャム語：Po Chan：神に選ばれた人)

Thin

Tib

Mum Tan (new mum) → Mum Cu (old mum) : Imam

Mum Tanは、3年で改選。任期を終えたMum Tanは、Mum Cuになる。

Thay Ca (チャム語：Karu最上位) : Hakim

Thay Chanは、少なくともクルアーンの20の章句を暗記していることが条件。Thay Chanは、家族、親せきより選ばれて、専門的な宗教学習 (Bani宗教儀式) を受け、生涯を通して最上位のKaru職位を目指す。一つの村落は、100-200家族からなり、村落「モスク」単位で、9-10人が選ばれる。

### ② ラマダーン月のThay Chan達の役割と礼拝

一般人は、一切礼拝含め宗教義務を果たさず、Thay Chan達が、礼拝含め、宗教儀式を取り仕切る。

#### a. ラマダーン月の礼拝

Thay Chan達が、ひと月間、「モスク」に寝泊まりして、毎日の礼拝をおこなう。ジュマア、ズフルとマグレブの礼拝は、参加者全員 (村代表の9-10人) のファルド (義務) であるが、イシャーは、参加者の体調次第で、欠席者もでる。又、ファジュールとアスルの礼拝は、参加者の中で2名を選び、その2名が行う。

#### b. ラマダーン月以外の礼拝

前月シャーバン月は、ラマダーン月の準備で、「モスク」のお清め等を行うため、礼拝は取りやめ。

その他、10ヶ月間、金曜日の礼拝のみ、選ばれた9-10人が「モスク」で行う。それ以外の礼拝は行わない。金曜日も、原則第一金曜日のみであるが、その週に葬式など重要な儀式があった時は、ジュマア礼拝は、第二金曜日に変更されるが、それ以降への延長変更は無い。

#### c. ラマダーン月の禁止事項

日中の食事も、選ばれたThay Chan達も、通常で、家族たちが三度三度の食事を運んでくる。

ただ、禁止されることは、Thay Chan達の (妻たちとの) 性交渉のみ。

#### d. ラマダーン月の特別な日

ラマダーン月の15、20、25日の夜は、特別な日で、一般バニたちが、相談に「モスク」まで出かけてくる。

この特別な日には、「願い事、告白など」を、「モスク」の中庭 (バニ一般人でも、「モスク」の中には入れない) で、Thay Chanに依頼し、礼拝を頼むことになる。又、(依頼礼拝の後) 中庭に出てきたMum/Karu (長老) を (一般依頼者が) 拜むことになる。

### ③ その他の儀式

#### a. 15歳の成人式

女子が、15歳になった時、Mum/Karuにより、木曜日・金曜日の二日間をかけて、儀式 (頭髮の一部を切り、燃やす) と命名式が行われる。女子の与えられる名前は、Fatimaか、Fatihaの2つのみ。

その後、長老司祭を入れ、家族・親戚での宴会が続く。(ある時の儀式では) 儀式代として40万ドン (約2千ドル) と、親せきから集まったお祝い金の1.5倍を追加して (集まった礼金の2倍を)、Mum/Karuに支払う。

男子の場合は、割礼のマネ (服装の上からナイフを当てる) をする程度で、女子ほどの儀式は無い。



女子の成人式、結婚式、お祝い宴席の多数の料理（写真左から）

b. 食事

ハラームな食物に関する知識もあるが、これを守るのは、Thay Chan達、選ばれた人たちだけで、一般人は、アルコールも、豚肉も口にすると。

c. 礼拝所「モスク」上述の様に、「モスク」に出入り出来るのは、Thay Chan達のみであり、一般人は、「モスク」の中庭まで。訪問した2ヶ所のチャンパ・バニ礼拝所「モスク」には、カギがかけられていた。



鍵の掛かった礼拝所へは、入れない。概観上は、民家と変わりなく、屋根の上に、目印が。

d. ウドー

簡素化されたウドーを行うが、「モスク」を外から除いた限りでは、水場の設備が整っていないかった。

e. 礼拝の回数（ラカート）と時間

イスラームと同じ回数と時間帯。

f. 祭事

Eid Fitri/Eid Adhalは、Thay Chan達によって執り行われ（「モスク」内での礼拝）、礼拝後、「モスク」の中庭で、一般人も集まって宴会をします。

g. その他

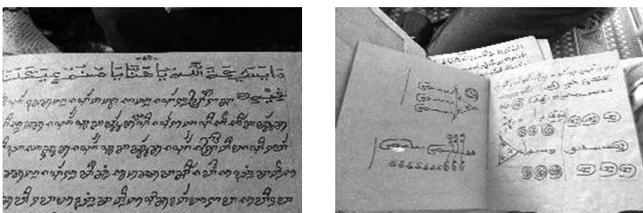
家を建てる、土地を開発する際、Karulに頼んで祭事をしてもらう。この（宗教儀式以外の）場合のKarulは、他地域の職業的Karulで、祭事日を占ったり、祈禱的な事も行うとの事。

h. 葬儀

家族から死者が出た場合、Mum/Karulに葬儀を依頼する。最近では、牛を二頭（約60百万ドン：約3千ドル）を、Mum/Karulに供出すると共に、葬儀代を支払うことになる。費用には、1億ドン（約5千ドル）もかかると。

i. クルアーン他書物

今回、チャンパ・バニ所有のクルアーンを見る事は出来なかったが、クルアーンの解説書、儀式取り進めの書き物は、セメント袋（廃紙）を利用して、特別なインクで、記載してあった。アラビア文字で読める部分もあったが、チャム文字の補足及び変形したアラビア文字は、読み取るのが難しかった。



クルアーンの解説書と儀式取り進め書

j. 埋葬地「QUBUL」

600年前から続く埋葬地を訪問。バニ用の埋葬地には、埋葬場所に3-40センチ台の石が二つ、数え切れない程、置かれていた。名前、埋葬年の記入は、何も無かった。一部に、名前の様なものを彫りこんだ石もあったが、基本は、無記名、無印。

600年前から続く埋葬地であり、バニ用の埋葬地ではあるが、この中には、チャンパ王国時代のムスリム・ムスリマたちも埋葬されているのではと考えられる。



チャンパ・バニの埋葬地の入り口と、無数に並ぶ二列の墓石。吊いの儀式写真。

④ Thay Chan達の既得権益

儀式等で色々な費用が必要とされ、それらの支払いは、結局Thay Chan達（長老：Mum/Karu）の所得になる事より、チャンパ・バニたちの宗教職位者は、バニからムスリムへの（自分たちの実入りが減る・既得権益が脅かされる為か）改宗に関して、非常に警戒心が強く、両派間の不仲、紛争にも繋がっていると見られている。

5) その他

ベトナムでは、Chau Doc地区（ベトナム南部の最大のムスリム社会の地区）以外では、宗教上の理由による、姓名の変更が認められていない。Chau Doc地区では、ベトナム名と同時に、ムスリム名を、正式に登録することが出来るが、他の地区では、パスポート等での正式な名称は、ベトナム名のみ。

ただ、IDカードに宗教名を記載する欄があり、宗教を記載することが出来る。



お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究所  
〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14  
TEL：03-3947-2419 FAX：03-3947-9416  
ホームページURL: http://www.sri.takushoku-u.ac.jp

拓殖大学 イスラーム研究所 ニュースレター

平成27年6月25日発行 第47号  
発行人 拓殖大学イスラーム研究所  
編集人 イスラーム研究所客員教授  
柏原 良英

## 正統四代カリフの時代－アブーバクル (24)

(前号より)

「アブーバクルは預言者の側近として最も高い地位と信頼を得ていたが、それによって傲慢な態度を取ることはなかった。不本意にも、もし、他の人に嫌な思いをさせることがあったならば、彼は急いで謝罪して、自分にも同じことをするように求めた。

その様子をラビーアが次のように伝えている。

私とアブーバクルの間で、ちょっとした行き違いがあり、アブーバクルは私に私の嫌いな言葉を使った。しかし、彼はそのことにすぐに気づき後悔した。「ラビーアよ、私に同じ言葉を言い返して下さい。」「いいえ、私にはできません。」「ラビーア、あなたは私に自分の権利を行なうべきです。そうでなければ、アッラーの使徒様に苦情を言いに行きます。」「それでも、私にはできません。」と私は答えた。アブーバクルは私を伴って、預言者のところへ向かった。私は彼の後から付いて行った。そこへ、私の出身部族・アスラム族の者達がやってきて口々に勝手なことを言った。「アッラーがアブーバクルに慈悲をかけますように。アッラーの使徒様はどんなことでも彼をかばうだろう。」

私は彼らに向かって言った。「静かにしなさい。彼はアブーバクルだぞ。アッラーが『洞窟での二人、二人のうちの二番目』と言った人物であるぞ。言葉に気をつけよ。アブーバクルの注意を引くようなことをするな。お前達が私の加勢をすつとみれば、アブーバクルは怒るであろう。アッラーの使徒様は彼の怒ったものに怒る。アッラーは彼ら二人の怒ったものに怒るのである。そして、私自信が滅ぼされてしまうから。決して騒いではならない。」

私はアブーバクルの後に続き、アッラーの使徒様のところまで行った。アブーバクルはアッラーの使徒様に事の次第を話した。アッラーの使徒様は私に顔をあげて言った。

「ラビーアよ、そなたとシッディークのあいだで何があったかな?」「アッラーの使徒様、彼は私の嫌いな言葉を私に言いました。それから、その報復として、同じような言葉を言い返すように私に求めましたが、私はそれを断りました。」

「よくやった。ラビーアよ。彼にそのような報復をしてはならない。むしろ『アブーバクルよ、アッラーがあなたをお許しになりますように。』と言いなさい。」

そこで、私はアブーバクルに「アッラーがあなたをお許しになりますように。アブーバクルよ。」と言いました。するとアブーバクルは泣きながらそこから立ち去ったのです!!

アブーバクルとしてはたとえ、一言であっても罪を犯したことに耐えられなかったのである。彼はその事の結末に涙したのである。ラビーアが彼を許したのであるが、彼としては報復を受ける以外には自分を許すことができなかったのである。

それは、かつて預言者が行なったことであり、アブーバクルは預言者の行動に倣いたかったのである。それは、バドルの戦いの時である。預言者が兵の列を整えていたときに、サワード・ビン・ガスィヤの腹を弓で押しながら、「真つすぐ並びなさい。サワード」と言った。すると、サワードが「アッラーの使徒様、私を咎めるのですか」と言った。預言者はすぐさま、自分の腹を刺出しにして、「さあ、私を咎めなさい。」と言った。サワードは預言者の早速の行動に驚き、預言者の腹に近付き、口付けをただけであった。この預言者の行動に倣いたかったのであった。

「アブーバクルへの教友達の言葉」

教友達はすべて預言者の側近としてのアブーバクルの地位を認識していた。預言者時代およびアブーバクルのカリフ時代はもとより、彼の死後においてもアブーバクルの地位は人々に語り伝えられていった。・・・ウマルの息子のアブドラーが伝えることには、

「私達は預言者時代に人々のなかで最良の人物を選んだことがあります。まず、アブーバクルを選び、それから、ウマル・ビン・ハッターブを選びました。それから、ウスマーン・ビン・アッファーンです。彼らすべてにアッラーの祝福がありますように。」

ウマルのカリフ時代にある集団がやってきてウマルに次のように言った。

「アッラーに誓って、あなた様よりも公正な裁きを行なう者、あなた様よりも真実を述べる者、あなた様よりも偽信者達に厳しい態度をとる者を私達は見たことはありません。あなた様はアッラーの使徒様亡き後、最良の人物です。」アウフ・ビン・マールクはその言葉を聞いて、次のように言った。「あなた方は間違っています。アッラーに誓って。私達は預言者様亡き後、ウマル殿よりも良い人物を見ました。」「それは誰ですか。アウフよ。」と彼らは尋ねた。「アブーバクル殿です。」と彼は答えた。ウマルも次のように言った。

「アウフは真実を述べた。あなた方は間違っている。アッラーに誓って、アブーバクル殿はムスク(麝香)の香よりも良い香であった。だが、私は家畜のラクダよりも迷っていた。(彼が多神教徒であったことを意味している。)」(次号に続く)

### 研究会報告

#### 【平成27年度第1回タフスィール公開研究会開催】

今年度第1回目のタフスィール(クルアーン解釈)公開研究会が、平成27年5月23日午後2時より文京キャンパスC館で開かれた。講師は森伸生当研究所長でクルアーン第14章イブラーヒム章1~23節を解説した。今年度も全7回に渡ってタフスィール公開研究会を開催していく。

#### 【平成27年度第1回イスラーム講演会開催】

6月6日午後3時より東京・六本木にあるイラン料理レストラン「アラジン」で今年度の第1回イスラーム講演会を行った。講師は、有見次郎当研究所客員教授で「イスラームの食文化」について講演された。この講演は、今年で10回目を数えるが、その特徴は普通の講演会と違って講義を聴いた後、実際にそこで学んだ知識を5感を使って体験できるところにある。受講者は、聞いたばかりのイスラームの食事における作法などに従ってイラン料理に舌鼓をうっていった。

محتويات العدد

1. مجلس قمة الحلال الدولي بماليزيا  
مساعد مدير معهد دراسات الشريعة : ياما زكي أكهيكو
2. مقالة عن الشريعة الإسلامية والدين (5)  
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
3. مقال عن المسلمين في فيتنامو (6)  
رئيس لجنة العلوم لمعهد دراسات الشريعة : موتوأجي
4. مقال : الخلفاء الراشدين (24)  
مدير معهد دراسات الشريعة : موري نوبوأو
5. الأخبار المعهد: الدورة الأولى لدراسات التفسير (سورة إبراهيم)
6. المحاضرة الإسلامية عن الأكل الإسلامي  
أستاذ زائر معهد دراسات الشريعة : أريمي جيرو